



FOUNDED 1905

茨城支部報

創刊号 (No.1)

(社) 日本山岳会茨城支部 (JAC Ibaraki)
Ibaraki Section of the Japanese Alpine Club

2008(平成 20)年 9 月 20 日発行

発行元住所 〒305-0045

つくば市梅園 2-21-21 浅野勝己方

目 次

- | | |
|-------------------------------|--------------------|
| p. 1・・・支部報発刊に当たって | p. 8・・・茨城支部役員名簿 |
| p. 2・・・茨城支部発足から現在までの経緯と展望 | p. 8・・・茨城支部会員名簿 |
| p. 4・・・2007 年度の活動報告 | p. 10・・・会員からのご挨拶 |
| p. 4・・・2008 年度の活動及び予定 | p. 15・・・ちょっと一服コーナー |
| p. 6・・・2007 年度会計報告と 2008 年度予算 | p. 16・・・あとがき |
| p. 7・・・茨城支部規約 | p. 16・・・巻末参考資料 |

(社)日本山岳会茨城支部報発刊に当たって

茨城支部長 星 埜 由 尚

この度、日本山岳会茨城支部報を発刊することになりました。支部の会員の皆様には、交流の絆となるよう、会員外の皆様には茨城支部の活動を知っていただき仲間に加わっていただける方が増えるよう、川久保忠通会員のご努力により楽しい支部報となるものと期待しております。

茨城支部は昨年 6 月 15 日に発足以来 1 年を超したばかりですが、隔月の例会と山行をほぼ欠かさず実施してきています。平均年齢はやや高いですが、山に愛着を持ちバラエティに富

んだ山行の実施とともに広く関連する話題にも関心を持ち、会員の様々な経歴と経験に基づいた講演などを通じて社会貢献をしていきたいと考えています。

支部報では、支部の活動を紹介するとともに、会員の山行記録、他支部との交流、本部の動静などもお伝えしていきたいと考えておりますので、会員各位の積極的な投稿などをお願いするとともに、広く会員外の方へご紹介いただければ有り難く存じます。

(社)日本山岳会茨城支部発足から現在までの経緯と展望

茨城支部事務局長 浅野 勝己

1. 支部設立の発端

2007年2月16日に首都圏支部創立委員会委員長の平林副会長（当時）ら4人の本部役員と我々6人の発起人との初懇談会をつくば市内のホテルで開催することが出来た。この話し合いで盛り上がり、是非とも茨城支部を設立しようという流れとなった。

そこで3月20日に茨城県在住の会員に支部設立を呼びかける文書を送付したところ、17人の賛同者を得ることが出来た。これにより“支部設立趣意書”を理事会に提出し、4月11日の理事会において、“入会者を20人以上にすることを条件”として支部設立が承認されたのである。

そこで6月15日に宮下会長ら3人の本部役員の出席を得て、我々21人の会員の参加のもとに茨城支部設立総会を開催し、日本山岳会の27番目の支部として発足することが出来たのである（写真1）。

本総会において、12条にわたる支部規約および支部長、事務局長、総務委員、経理委員の各1人さらに監事2人がそれぞれ承認された。第3条では目的として会員相互の友好と山行、講演会の開催などが規定され、とくに第10条では入会金1,000円、年会費1,500円がそれぞれ規定され6月15日より施行することとなった。

2. この1年間の回顧と展望

当初21人の会員で発足したが、現在26人となり、この1年間で5人の新会員を迎えることが出来た。毎回約30人の一般市民へ向けた公開講演会は、2ヶ月ごとに開催され、今日まで6回にわたり実施して来ている。

とくに第1回目と本年の創立1周年記念講演会の2回は、星埜支部長による“伊能忠敬に始まる科学的地図”および“景観と地図”につ

いてきわめてわかりやすい内容で聴衆に大変好評であった。また5回目の川久保会員による“崑崙山脈西部の山旅と高所順応について”は、地元紙の常陽新聞の取材を受け、5月22日の朝刊に写真入りで詳細な記事が紹介された（巻末資料参照）。

次に昨年12月の年次晚餐会には当支部より9人の会員が参加した（写真2）。又、販売コーナーでは中垣監事による自著販売が行われた（写真3）。

次に山行については、第1回の筑波山登山を最初に、今日まで隔月ごとに5回実施して来ている。このなかに本年2月に日光で開催された栃木、千葉、茨城の3支部合同懇親山行が含まれている（写真4）。

今後の展望としては、まず会員の勧誘増加があげられる。このためには日本山岳協会の茨城県山岳連盟および高体連登山部との交流を深めていくことが肝要と思われる。またこのたび当支部に支部特別会員制度を創設した。この制度を活用してとくに若い人の参加を期待したい。



（写真1）茨城支部設立総会
（第1回総会）
（土浦ウララ5階の会議室にて）

茨城支部設立総会

2007年6月15日に宮下会長ら3人の本部役員の出席を得て、21人の会員が参加した（写真1）。

日本山岳会年次晩餐会

2007年12月1日の年次晩餐会に茨城支部より9人が出席した（写真2）。この晩餐会に於いて当支部と栃木・千葉の3支部の新設が紹介された。



（写真3）日本山岳会晩餐会販売会
茨城支部コーナー

三支部（栃木・千葉・茨城）合同懇親会

2008年2月2日～3日、奥日光湯元温泉「湯の湖荘」で行われ、茨城支部から星埜・高木・冨田・浅野の4人が出席した（写真4）。



（写真2）日本山岳会年次晩餐会



（写真4）三支部合同懇親会（奥日光湯元）

2007 (平成 19) 年度の活動報告

茨城支部総務委員 高木 康雄

講演会

第 1 回：「伊能忠敬に始まる科学的地図」星 埜由尚（茨城支部長）9/30（土浦ウララ 5 階）

第 2 回：「免疫化学について抗原と抗体、その化学反応――食物アレルギーあるいは杉の花粉症など――」奥井清（茨城支部会員）11/18（土浦ウララ 5 階）

第 3 回：「NHK プロジェクト X 第 1 号 命がけの富士山測候所の現状と未来」浅野勝己（茨城支部事務局長）1/20（土浦ウララ 5 階）

第 4 回：「聖山・カイラスを巡礼して」酒井國光（茨城支部会員）3/16（土浦ウララ 5 階）

三支部（栃木・千葉・茨城）合同懇親山行

第 1 回：奥日光・切込湖刈込湖スノーハイキング他（栃木支部担当）（2/2～2/3）

支部山行

第 1 回：筑波山と親睦会（9/29～9/30）

第 2 回：八幡平・源太ヶ岳～大深山～八瀬森～大白森～乳頭温泉郷縦走（10/7～10/9）西川（L）・高木

第 3 回：阿武隈山地・矢大臣山と東堂山（12/22）西川（L）・高木・星埜（夫妻）・富田

第 4 回：愛宕山～難台山～吾国山縦走（2/23）高木（L）・他 5 人参加（写真 5）



（写真 5）難台山頂上にて

2008 (平成 20) 年度の活動及び予定

茨城支部総務委員 高木 康雄

総会（第 2 回）

2008 年 6 月 15 日に土浦ウララ 5 階の会議室に於いて会員 13 人の参加で行われた（写真 6）。

総会での決議事項として

1. 役員として支部長代行と広報委員の新設が決まり、又、監事 2 人の改選が行われた。
2. 支部特別会員（支部友）制度を創設した。
3. 以上に伴う支部規約を改正した。

総会の後、会員一同は総会会場近くの奥井支部長代行宅に集まり、そのサロンで懇親会を開き、大いに語り合った。(写真7)



(写真6) 第2回総会
(土浦ウララ5階の会議室にて)



(写真7) 総会後の懇親会(奥井サロンにて)

講演会

第5回：「崑崙山脈西部の山旅と高所順応について――6232m 峰と 6468m 峰初登頂――」川久保忠通(茨城支部会員) 5/18(土浦ウララ6階)
(巻末資料参照)

第6回(創立1周年記念講演)：「景観と地図」
星埜由尚(茨城支部長) 6/15(土浦ウララ5階)
(写真8)

第7回：「自然保護活動について」自然保護委員(11/9)(土浦ウララ5階)

第8回：タイトル、講師未定(1月中旬)

第9回：タイトル、講師未定(3月中旬)



(写真8) 創立1周年記念
第6回講演会「景観と地図」

3支部(栃木・千葉・茨城)合同懇親山行予定

第2回：山域未定(H21/2/7～2/8) 千葉支部が担当

支部山行報告&予定

第5回：高鈴山・金山百体観音縦走：参加者9人(内、支部外参加者3人、リーダー：荒木)で実施した(4/20) (写真9)。



(写真9) 高鈴山頂上にて

6 回：自然観察会「西金砂山を訪ねる」
 （森林インストラクター）堀内孝雄（茨城支部
 会員）（9/20）

7 回以降：隔月に実施予定（日程と山域未定）

2007 (平成 19) 年度会計報告と 2008 (平成 20) 年度予算

茨城支部経理委員 西川 元禧

2007 (平成 19) 年度会計報告

収 入 の 部	
支 部 費	45,000円
支部助成金	50,000円
その他収入	59,498円
収 入 合 計	154,498円

支 出 の 部	
会 場 費	15,500円
郵 送 料	12,064円
印 刷 費	4,700円
事務用品・雑費	19,301円
設立総会費用	37,400円
他支部総会出席	7,500円
支 出 合 計	96,465円

差引次期へ繰越	58,033円
---------	---------

*平成 19 年度報告については、監事より
 適正である旨の監査意見を受けていま
 す。

2008 (平成 20) 年度予算

収 入 の 部	
前期より繰越	58,033円
支 部 費	38,000円
支部助成金	55,000円
収 入 合 計	151,033円

支 出 の 部	
会 場 費	21,700円
郵 送 料	15,000円
印 刷 費	6,000円
事務用品・雑費	15,000円
支部総会費用	30,000円
共益事業費	35,000円
支 出 合 計	122,700円

差引次期へ 繰越	28,333円
-------------	---------

(社団法人) 日本山岳会茨城支部規約

(名称)

第1条 本支部は、社団法人日本山岳会茨城支部 (Ibaraki Section of the Japanese Alpine Club) という。

(事務所)

第2条 本支部は、事務所を茨城県内に置く。

(目的および事業)

第3条 本支部は日本山岳会定款第3条に定められた目的に則り次の事業を行う

- (1) 会員相互の親睦の為の会合、山行
- (2) 登山の指導奨励に必要な集会、研究会および講習会等の開催
- (3) 自然保護活動の推進
- (4) 支部機関紙の発行
- (5) 目的を同じくする他の団体との連絡および協力
- (6) その他、目的を達するために必要な事業

(会員)

第4条 本支部の会員は、茨城県に在住、在勤、在学し支部に入会を希望する日本山岳会会員 (以下会員という)、又は本支部規約の趣旨に賛同し、支部に入会を希望する会員とする。

(役員)

第5条 本支部には、次の役員を置く、支部長 1 名、支部長代行 1 名、事務局長 1 名、総務委員、経理委員、広報委員、各 1 名、監事 2 名、自然保護委員 3 名、合計 11 名。

(役員を選出および任期)

第6条 本支部の役員は、総会において支部会員の中から選出する、役員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。

(役員の仕事)

第7条 役員の仕事は次の通りとする。

- (1) 支部長は、本支部の業務全般を管掌し本支部を代表する。
- (2) 支部長代行は、支部長を補佐し、支部長不在の時は支部長を代行する。
- (3) 事務局長、総務、経理、広報、担当委員は、支部の運営について支部長と協議し業務を執行する。
- (4) 自然保護委員は、本部と連携し、自然保護活動に率先垂範し、意見具申と具体策について支部長ならびに支部と協議し業務を執行する。
- (5) 監事は、役員の仕事及び支部の会計を監査し毎年総会に報告する他、各種会議に出席し、意見を述べる事ができる。

(会議)

第8条 本支部には総会および委員会を置き、総会を以って本支部の最高議決機関とする。

- (1) 通常総会は、毎年 1 回支部長が招集する。但し、支部長、支部長代行、監事または委員が必要と認めたときは、支部長は臨時総会を招集することができる。総会の議長は支部長とする。
- (2) 次の事項は総会の承認を受けなければならない。

- ① 事業計画および収支予算に関する事項
- ② 事業報告および収支決算に関する事項
- ③ 支部規約の設定、改廃
- ④ その他委員会で必要と認めた事項
- ⑤ 委員会は、原則として毎月 1 回支部長が召集する

(会計)

第9条 本支部の事業遂行に要する費用は、支部会費、寄付金その他の収入を以て支弁する。

(支部会費および入会金)

第10条 支部会員の入会金は、1,000 円とする、
また年会費は 1,500 円とし毎年6月末日までに納めるものとする、支部会費を未納の会員には、会報その他の連絡を停止することがある。

(支部特別会員の会費および入会金)

第11条 支部会員のほかに、支部特別会員（支部友）の参加を認め、その入会金は 1,000 円、年会費 2,000 円とし毎年6月末日までに納めるものとする。
支部会費を未納の特別会員には、会報その他の連絡を停止することがある。

また、支部特別会員は茨城支部の活動に参加の範囲を限定されるものとする。
ただし、支部長の判断により、本部行事への参加、情報、などは協議できる。

(会計年度)

第12条 本支部の会計年度は、毎年4月1日より翌年3月31日までとする。

(規約の変更)

第13条 本規約の変更は、総会において出席者の3分の2以上の議決を経なければ変更することができない。

付則 本規約は、2008年6月15日より施行する。

日本山岳会茨城支部役員名簿

茨城支部事務局・つくば市梅園 2-21-21 *浅野事務局長宅 TEL&Fax029-851-0015

支部長	：	星埜 由尚	(13985)
支部長代行	：	奥井 清	(4999)
事務局長	：	浅野 勝己	(12875)
総務委員	：	高木 康雄	(10679)
経理委員	：	西川 元禧	(11916)
広報委員	：	川久保 忠通	(14221)

監事	：	富田 郁夫	(8491)
監事	：	荒木 浩二	(11897)
自然保護委員	：	堀内 孝雄	(11526)
自然保護委員	：	和田 光弘	(12154)
自然保護委員	：	山口 定男	(9760)

日本山岳会茨城支部会員名簿

【インターネットでの閲覧版では、
この部分の掲載は割愛しています。】

【インターネットでの閲覧版では、
この部分の掲載は割愛しています。】

山本 幸生

登り続けて 50 年

茨城支部創立一周年おめでとうございます。支部執行部から一周年に因んで何か書くようにとの要請がありましたので、JAC のそうそうたる会員の多いなか、私のつたない山行遍歴を簡単に書いてみました。

1955 年（昭和 30 年）6 月のある日、その年 4 月に新規入社した社員のうち、気の合う仲間 4 人で誰言うともなく、大菩薩に登ることになった（当時は観光気分か？）。通勤スタイルのままで、当日土曜日の午後映画を見てから、夜行列車に乗って新宿を発ち、翌朝塩山駅で降りバスで裂石登山口まで行き、そこから登りだしたけれど、大菩薩峠近くなると雨が降ってきて、結局、頂上までは行けずびしょ濡れになって丹波に下り旅館に飛び込んだ。

これが私の登山らしきものの最初で、それから今日まで途中には職務の都合、結婚・子育て、腰痛など何回かの 2～3 年の中断があったが、登り続けて今年で 53 年が経過した。これもひとえに山仲間、家族の協力と励ましのおかげと御礼と感謝を申し上げます。

皆様ご存知のように、1950 年（昭和 25 年）ネパールは鎖国を解いたので各国は競ってヒマラヤへ遠征しました。1953 年（昭和 28 年）イギリス隊はついに世界最高峰エベレスト（8848m）に登頂し、また、日本隊は世界八位のマナスル（8163m）に 56 年（昭和 31 年）第三次登山隊が登頂に成功しました。そうした状況の中で昭和 30 年代は登山が一種のブームになっていました。

私は東京の下町で生まれ育ったためか自然にあこがれる気持ちが潜在的にあったのかもしれない。また生来の虚弱体質を強くしたいとの気持ちもあったと思う。その後、丹沢や奥多

摩の尾根や、沢に一人で登っていたが、会社の山好きの先輩に誘われ 1957 年（昭和 32 年）社会人山岳会に入りました。その山岳会の入会条件は大変厳しいもので、毎年 4 月に新入会員の募集があり、一ヶ月の間に 3 回の強行トレーニングが実施され、そのうち 2 回をクリアしなければならない。（例えば、伊豆の伊東駅から天城山を登り八丁峠までを前夜の 10 時頃から翌日の午後 3 時頃まで歩き続けるというものです）また、雪山は一年に 15 日入らなければならないなど。入会希望者の大半は脱落していった。私は運よく入会でき、そこで登山のいろはから沢登り、ロッククライミング、冬山と一通りの登山を経験し、指導を受けました。今思うとその頃はただがむしやりに山に登っていたと思う。中年になってからはハードな登山よりも景色を眺め、木や森を見、鳥の声を聞き、花を愛でるという余裕のある山歩きが好きになってきた。

深田久弥の名著「日本百名山」（新潮社）は初版発行時（1964 年（昭和 39 年）7 月）に購入し、私の愛読書となっているが、当時、今とは交通事情その他、山を取り巻く環境はだいぶ違うとは思いますが「全部登れたらいいなー」程度の気持ちはあったかもしれないがとても登れるものではないと思っていた。1966 年（昭和 41 年）8 月から 1981 年（昭和 56 年）4 月まで約 15 年間、転勤で九州に住んでいた（福岡、長崎、北九州）。その頃は会社の山好きの仲間と九州の山々を歩き、ほぼ歩き終えた後は中国、四国、関西の山々、また北アルプスにも足をのばすようになった。1981 年（昭和 56 年）5 月転勤により東京に戻ってきた。（取手市在住）たまたま、「日本百名山」の本を見ていて、今まで登った山を数えてみたら 37 山あった。まったく意識しないで登山を続けていたら 37 山

になったのだから、もしかしてこれから頑張れば「百」は登れるかもしれないと思い、以後できるだけ意識して百名山を登るようになった。だが、ピークハントをして数だけを増やす登山だけはしたくなかったので山域によってはテントを持って縦走をしたりした。当初の予定では残り 63 山を 10 年程度で登れると見ていたが、中断期間があったり、北海道の山は季節の制約とサラリーマンの身では費用と休暇が思うようにならず、結局最後まで残ってしまい予定の期間では登ることはできなかったが、サラリーマン現役中の 1995 年（平成 7 年）8 月に当初の計画より 4 年程度遅れたが「鳥海山」を登って「日本百名山」を達成することができ、大変うれしかったことが思い出されます。（当時 58 才）

その間、1987 年（昭和 62 年）12 月、望月達夫、浅野孝一両氏の紹介で日本山岳会に入会した（会員番号 10196）。また、公募登山の秩父御嶽山に参加した縁で 1990 年（平成 2 年）3 月「取手山の会」に入会してからはさらにいろいろな山へ行く機会が増えた。1997 年（平成 9 年）9 月、サラリーマン生活をリタイアした。

海外登山はサラリーマンの身ではたいしたところへは行けず山の先輩浅野孝一氏の勧めで 1988 年（昭和 63 年）12 月に会社の山仲間と台湾最高峰の玉山（3952m）を登って以後、台湾行き 6 回、6 山を登りました。そのほかは、

- 1996 年（平成 8 年）10 月 マレーシア・キナバル（4101m）：取手山の会 20 周年記念登山
- 2000 年（平成 12 年）5 月 ネパール・カラパタール（5545m）
- 2001 年（平成 13 年）1 月 南米最高峰アコンカグア（6400m まで）
- 2003 年（平成 15 年）4 月 ネパール・アンナプルナ、ダウラギリトレッキング
- 2004 年（平成 16 年）2 月 アフリカ最高峰キリマンジャロ（5896m）

これからも私なりに目標を持って体の許す限り山登りを続けていきたい。まだ一度も登っていない山、登ったピークとピークを結ぶ稜線、若いときに登った山の再訪などなど。

酒井 國光

穂高落穂拾いの記

ここ 5～6 年、よく上高地に出かける。今年も開山式前日から 9 日間行っていた。定宿は小梨平。朝は小鳥の囀りで目覚める。横になったまま鶯の美声に聞き惚れる。カーテンを開けると、カラマツ越しに真っ白に雪を纏った岳沢を囲む山々。しばし見とれる。

朝霜の降りた河童橋へ。梓川辺りのケシウヤナギは朝霧に煙り、清流は足下へ流れ込む。奥穂、西穂の雪面は朝日に輝き、岳沢には明神の影が大きい。焼岳は静かに噴煙を上げて佇む。まだ観光客は来ない。天地創造の神の最高傑作「上高地」独占だ。一昨年程ではないが、今年も残雪が多かった。それを利用して、涸沢へ、徳本峠へ、岳沢へと歩き回る。

五月下旬、ニリンソウを求めて、明神池畔嘉門次小屋に宿をとる。ここの朝はカッコーの声で目覚める。耳を澄ますと「カッコー」「カッコー」が遠く近く林間を渡ってくる。

早朝の明神池は正に神御座します幽玄郷だ。鏡のような池面に明神の山肌、新緑の樹々が倒影し実に美しい。写真に（これ私）、スケッチに（こちら妻）、朝食前のひと時我を忘れる。ニリンソウの最大のスポットは徳沢園。真昼、「カー」と花びらを先端までカー杯広げた時が見頃だ。

六月下旬、梅雨の上高地も良いだろうと出かける。幸か不幸か昨年も今年も嘘みたいな上天気。焼岳の頂上で至福のひと時を過してしまった。更に、夜は定宿のスタッフ一同との宴会。山にも人にも満足満足。

実は最近の上高地行は、私にとって「穂高落穂拾い」なのだ。昭和 40 年代前半、夏冬と足繁く穂高へ通った。そこには「滝谷」があった。当然のこととして上高地など素通りだった。結果的にそんなに数多くは登っていないが、「我が青春は厳冬期の滝谷にあり」とさえ思っていた。それも昭和 46 年度の冬に初期の目的「滝谷末端から第二尾根を経て奥穂高岳往復」を達成し（『岳人』305 号）、以降「黒部川流域

の山々」へ、のめり込んで行った。

フランスの作家アナトール・フランス曰く「もし私が神様なら青春を人生最後の部分におくだろう」と。けだし名言。

そうだ、私も言おう。「我が(晩年の)青春は上高地にあり」と。(2008.7.20)

西川 元禧

茨城支部・皆で楽しみましょう

昨年6月15日に支部が設立されて1年を経過しましたが、振り返って見ると、それに先立つ2月16日、支部設立についての話し合いがつくば市内のホテルで開催された。

茨城県在住の会員6名と本部から平林副会長や神埼総務委員等4名が出席。支部設立の趣旨、設立の要件等々の説明があり、会員6名が設立発起人という事になった。

そして6月15日設立総会開催という運びになったが、私は以前からシルクロード旅行の日程が決まっていて、この記念すべき総会には出席出来なかった。シルクロードから帰ってきたら成り行きで経理委員となり、支部との関わりが次第に深くなってきた。

元々、本部の三水会(昔の東京支部の名残とか)や、フォトクラブに参加し毎月例会に出席していたが、支部が出来た後も続けており、支部例会・講演会や支部山行が加わって日本山岳会関係で出かける事が多くなってきた。それまで自分で登りたい山を選んで毎週のように出かけた山行も、日程が重なって時には行けなくなる事もある。

それでも支部例会や講演会、その後の飲み会等を通じて、支部会員の皆様がそれぞれ特技をお持ちで、ある分野の専門家だったり、特定の山域に詳しくあったり、海外の山にも詳しいとか、日本300名山の完登が間近という方もある事を知って、人間的な広がりが出来、山仲間が増えたのを大変喜んでいます。

実は、私も日本300名山完登を目指して残り15山です。他に東北百名山(残り16山)、

山梨百名山(残り10山)、信州百名山(残り6山)等も併行して目指しています。その他にも完登は別にして次に登る山・面白そうな山を探す時の目安として、北海道百名山(まだ残り半分)、関西百名山(登ったのが1/3)、九州百名山(登ったのが25山)や一等三角点の山、各都道府県最高峰も参考にして選んでいます。勿論その他の山にも登りますし、又、同じ山でも季節やルートを変えて何度も登る事もあります。完登に興味がある方、あるいは完登には興味は無いが登ってみたい山だと思われる方、是非御一緒して下さい。

会員20名以上という支部設立要件をギリギリ満たしてスタートした全国一少人数の支部ですが、見方を変えれば、多人数の大支部では顔と名前が一致しない会員が多く、会員同士のつながりが希薄な支部もあるようで、茨城支部では少人数ならではの支部会員相互に密度の濃いクラブライフを楽しむ事が出来そうです。これから支部会員の増員や支部特別会員(支部友)を募集して次第に仲間が増えて行けば良いと思います。

山岳会ですから、今後は会員相互に山行計画を出し合って出来れば毎月、支部山行として日本各地の山を歩くようになれば良いと思いますし、時には史跡巡り、温泉、飲み会等を織り込んでも良いと思います。あるいは日本の山だけでなく、ヒマラヤ、カラコルム、パミール、天山、崑崙、東チベット横断山脈、アルプス、ロッキー、アンデス、等々、海外の登山やトレッキング等にも一緒に出かけて大いに人生を楽しもうではありませんか。

高木 康雄

茨城支部1周年に思う

日本山岳会は、2005年10月に100周年を迎えた。茨城支部は2007年6月15日に27番目の支部として誕生したが、支部では最小の会員数であり、会員数の増加が大きな課題となっている。この1年間は星埜支部長、浅野事務局

長を中心に6回の講演会と5回の山行で少人数ながらまとまりのある活動が展開できたと感じている。奥井サロンでの親睦会も回数を重ねるごとに発展的な会話も出て、今後は地域に密着した活動も期待できるだろう。

思えば、1990年5月に日本山岳会に入会し、本年度で早くも19年目となった。会社勤めの40歳に、禁煙で太り始めた身をもてあまし会社の山岳部仲間と山歩きを始め、その後の藪山歩きの出会ひの中で、望月達夫・浅野孝一両氏の紹介で入会できた。

当時は三水会に所属し、多くの諸先輩方から、山の楽しみ方やクラブライフを学ぶ機会を得た。又、2000年8月には日本山岳会とカナダ山岳会が行ったアルバータ峰初登頂75周年記念トレッキングに参加し、ジャスパーでの町を挙げての祝賀会イベント等、思い出に残る行事に参加でき、2008年4月には、JACヒマラヤ環境調査隊に参加、憧れのエベレスト街道からカラパタールとイムジャ氷河湖を訪れ、チョモランマを仰ぎ見る機会を得た。イムジャ氷河湖については、地球温暖化への強い警鐘と受け止めた。

日本山岳会ならではの行事や情報を仲間と共に共有し、今後の茨城支部の活動に生かして行きたいと思っている。

奥井 清

水郷の思い出

昭和30年代まで駅ホームから先は見渡す限りのアシ原で、雨のあとは水溜り、天気が続くと中に入って歩けるような所で、霞ヶ浦はへりに松林があり、きれいで泳いで湖底が良く見えました。

駅を降りると川魚屋が10軒ぐらい、店の前で炭火を起こし、ワカサギを焼いて売っていました。駅から家への焼き魚の香りがしたものです。

中城通りは県南の商業の中心で、人々は玉造あたりから船で買い物に来ていました。霞月

楼の脇、奥井薬局の前、今の高架道路は水路で、釣りに来た東京の趣味人が釣った魚を持ったまま船で霞月楼に入っていました。小船が入る水路がいたる所にあり、船の交通の要でした。

私の父は、石岡の近江屋宗兵衛の息子で、母は佐原の三輪家から、父の叔母さん2人は野田のキッコーマン茂木家に嫁に行きました。昔はお嫁さんのやり取りも県を越えて水路で行ったり来たりしたものです。江戸崎と言う町も江戸へ行く崎だったからです。

中城町は旧水戸街道で霞ヶ浦の水が上がって洪水の時、交通に困らないように馬の背のように高く盛り上がり作ってあります。今年電柱を地下に埋める作業の人が掘り返していますが、天然石の大きな石が沢山出て来てびっくりしたと言っていました。

荒木 浩二

支部のこれからに

ここ1年、会のお世話に甘え、これからもこれ続けさせていただければ、などと思っております。ただ、自分の思いと能力を併わせて気分良く登りきることを続けるつもりです。

しかし、いろいろと気になって気分良くは行かない事があります。自分の勝手とも言える事が、すんなり通る今時では無いでしょうが何とかならないか、と苦しんでいます。

事の一つは、身体だけで攀じ登り人工による支点を使用しない登攀（フリークライミングともいう）について、中央としての取り扱い方が決定していないためか支部としては問題にしないのは当然とも思います。登山では無いと割切ればです。しかし、このような登攀同好者が全国的組織を作り職業行為は当たり前として活動し、人数は、2000人位ではないかといわれております。喜ばしい事かもしれません。

事の二つ目は、登行を同じくする支部の方々と登行を行う時の、事故対応についてです。事があったら相互扶助が基でしょうが、先立つものがが必要です。登る人は全て保険に入って他

への迷惑を少なくしたいものです。中央で取りまとめている団体傷害保険を利用し、また多くの方々に加入をすすめて割引率を高くし各人の負担を軽くしては、と思います。また各支部でもこの方向を取り上げていただくと共に、出来れば登山団体としての責務として中央で強力に推進し十万人規模のものになったらと思います。現状、登山についての保険は各種ありますが、取りまとめ方にいろいろあり、余剰金ともいえるものを組織の運営や競技の実施費用にあてられているらしいとの登山者の心を逆撫でする事ではなく、そのような状況の時は、技術普及、遭難防止等の方向に振向けていただきたいと思っております。

事の三つ目は、自分より若い方に接する事です。あなた方の頃は、初登頂が高度のある水準であり、初登攀、新ルート開拓もあり、人生を投入してきた事で高い評価を得ている。しかし後に続くものとして、そのような背景は無いようです、と言われました。このことについての解決を求めたい気がしております。

何かと、よろしく願いいたします。

和田祐之介（光弘）

（偕楽園公園を愛する市民の会会長）

日本一の梅園造りへの取り組み

水戸藩9代藩主徳川斉昭公が藩校の弘道館を開校したのは天保16年8月1日です。文武の教場以外に医学館も増設され、名実共に総合大学的藩校でありました。それに遅れること1年、偕楽園が造園されました。学校の弘道館が開設されてから、休養の場である偕楽園が出来ましたことは「よく学び、よく遊ぶ」という言葉を思い起こさせるもので、公の思想を良く表しております。園名の偕楽園であります、その元は孟子の「昔の賢者は自分だけの欲を専にせず、楽しみは庶民と偕（トモ）にする」から名付けたとされます。

斉昭公はことのほか梅樹が好きで、「梅は雪を冒して春に魁（サキガケ）花を開き、実は酸を

含み渴を止め、軍慮の用となり、薬にもなる」（種梅記）として植えることを奨励いたしました。いかにも天下に魁ける斉昭の気性をよく表していると思います。公は江戸から梅の種7,300個を水戸に送り、偕楽園などに植えさせたと記録にあります。

園は幕末の動乱、戦災により一時著しく荒廃しましたが、現在梅は100品種、3,000本と称されており、私たちはかけがえの無い梅の銘品を保存すると共に、全国各地の著名な梅園より品種を蒐集することにしました。

平成18年3月に私共は「偕楽園公園を愛する市民の会」を設立し、昨年3月に「平成梅林整備委員会」を立ち上げ、会の事業として正式に取り組み始めました。“市民の力で偕楽園を日本一の梅園にしませんか”というスローガンの下、市民運動を展開し、全国の沢山の方々に厚い協力を頂きました。そして本年2月に第1回植樹祭を開催いたしました。来年の2月には第2回の植樹祭を開催し、さらに200品種の梅苗を植えることになっております。これで合計420品種となり、名実ともに日本一の品種の多い梅園になります。平成22年には500品種まで増やす計画です。

斉昭公に思いをはせ、偕楽園造園当時のように日本一の梅園にするため、民（市民）と偕（とも）に力をあわせ、永く偕楽園に関わることを偕に楽しみたいと思っております。

川久保 忠通

山と人との付き合いが楽しくて

中学生時代に友人のお兄さんから郷里熊本の名峰「阿蘇の高岳」に連れて行ってもらって以来、ボツボツながら山を続けて来ました。昭和48年つくばに来て数年経った頃、私の職場とは異なりますが、電総研（現在の産総研）山の会に会友として参加させてもらい、山スキーの手ほどきを受けました。ところが20年以上も経つと皆高齢化して来て私と一緒にしてくれる仲間が少なくなって来ました。数年前、

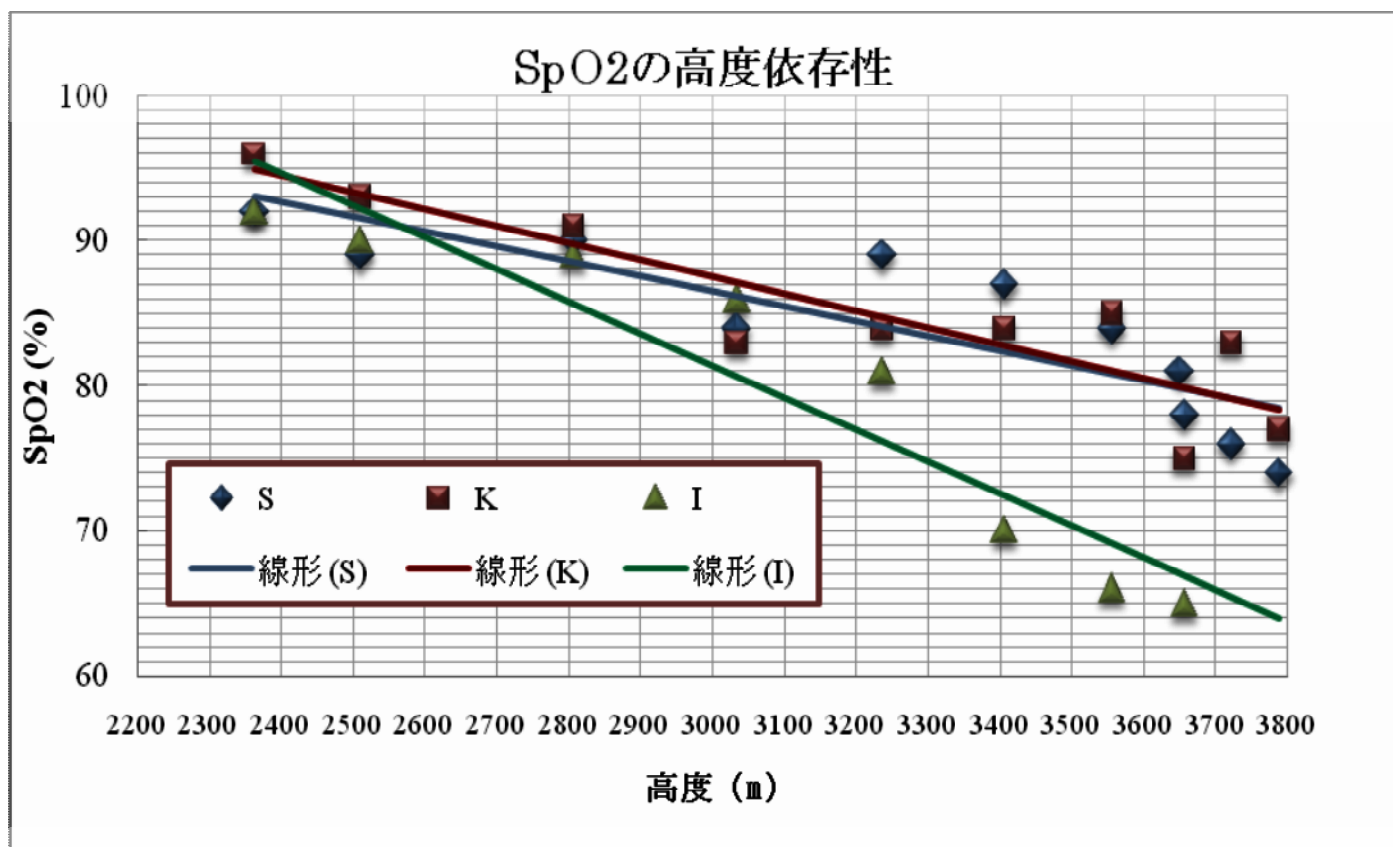
大学山岳部 OB の会で私よりひとまわり以上若い仲間に時々山スキーに連れて行ってもらう事があり、自分の山スキー技術の乏しさが嫌になるくらい思い知らされ、彼の属する日本山岳会のスキー部に入れてもらう事にしました。ところがその入会手続き中にひょんな事から東京渋谷に本拠地を持つ山スキーの会に入会する事になり、すごい体力・気力・技術・人間性を持った人たちと山スキーを共に過ごす事が出来るようになり、日本山岳会のスキー部に入

る必要がなくなりました。というのはいくら私が暇人（昨年4月から年金生活者の身）で物好きでもハードな山行をやっている二つの会で活動するには時間的にも体力的にも無理があるからです。

という訳で、当初の目的の為には日本山岳会に在籍する必要はなくなった訳ですが、日本山岳会茨城支部で、色々な世界で活躍されておられる方々と知り合いになる事が出来、別の意味で入会して良かったと思っています。

ちよっと一服コーナー（熟年オジサン達の富士登山）（川久保記）

先日 S 氏(62 歳)と I 氏(60 歳)と K (私:64 歳)の 3 人のジョギング仲間で富士宮口の 5 合目から富士山に登って来ました。S 氏は若い時によく山に登っており、今は毎月 200km 以上のジョギングをしている元気な人で、この 10 月にネパールのトレッキングに行く予定です。私も 11 月に台湾の山に登るので予め高所順応をしておこうと 2 人で 7 月にも須走口から富士山に登りました。ところが I 氏は「一生の内に一回くらいは富士登山をしてみたい」という山には全くの素人で、近頃は仕事が忙しくて月にせいぜい 30km 程度しか走っていない様子です。今年の 9 月 7 日朝 5 時に 5 合目を出発し、ゆっくりですが着実に歩いて 10 時 10 分に 9.5 合目まで来ました。ところが、I 氏はそこから高所の影響が出て数歩行っては立ち止まるという状態となり、1 時間 30 分かかってようやく頂上に着きました。この時の 3 人の SpO₂（動脈血酸素飽和度）をパルスオキシメーターで測定した結果を下のグラフに示します。高度が上がるにつれて SpO₂ の下がり具合が S 氏や K より I 氏の方がずっと急激である事が分かります。このように SpO₂ の測定結果からも I 氏が高度に順応していない事が分かります。



あとがき

編集者から

今年度の総会の前に突然浅野事務局長から電話があり、「広報委員をやってくれないか」との依頼されました。浅野さんには今まで色々お世話になっている関係で断るわけには行かず、引き受けてしまいました。支部報を作るに当たり、幸いにも日本山岳会栃木支部の支部報が手元にありましたので体裁は殆どその模倣をさせて頂きました。

せつかくならその手本よりもっと読みやすく美しい物を作ろうと思いましたが、デザインや絵のセンスが全くない私にはとても無理で、残念ながら手本より数段劣ったレイアウトになってしまいました。でも支部報の内容自体は著者の皆さん方の山への思いが溢れていて手本と遜色の無いものであると思います。

(川久保)

巻末参考資料

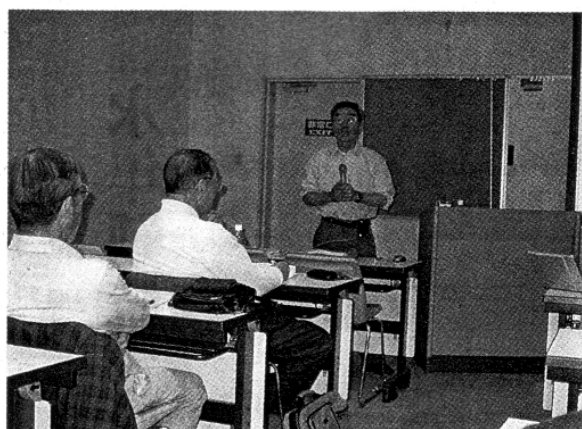
崑崙山脈西部の山旅など紹介

日本山岳会茨城支部

つくばの「高所登山の参考」に 川久保さん

日本山岳会茨城支部の第5回講演会が18日、土浦市大和町の県県南生涯学習センターで開かれ、つくば市在住で同支部会員の川久保忠通さん(63)が、「崑崙(こんろん)山脈西部の山旅と高所順応について」と題して、体験談や高所登山での注意点などを語った。(吉田裕美)

崑崙山脈は、チベットと新疆(しんきょう)ウイグル自治区の境を東西に走る山系。川久保さんは昨年夏、京都大学学士山岳会の登山隊(メンバー5人)の一員として、崑崙山脈西部の未踏峰6232.2mと6468mの峰の登山に挑み成功した。



登頂の体験や高所順応に関して話す川久保忠通さん。土浦市大和町の県県南生涯学習センター。

同隊の平均年齢は62歳。講演で川久保さんは、事前の体力トレーニングや各隊員の高所体験を紹介。登山までの経路、途中のできごとや印象などを地図や映像を見せながら話した。ベースキャンプまで送ってくれた、現地の運転手には、『自分の父親と同じぐらいの年齢の人たちが、高い山に登るので感銘を受けた』と言われました。

また、登山期間中には毎日朝晩、隊員たちの動脈血酸素飽和度(SPO2)と脈拍を測定。そのデータをさまざまなグラフで示し、高度順応度や体力、登山スピードなどとの相関関係を解説した。高度が上がるにつれて、SPO2が低くなり、脈拍は増える傾向にあることが分かったという。

「これまでに高所医学の教科書に書かれていたことを追認するだけだが」と述べたうえで、「高所キャンプでのSPO2が目ごとに下がる場合は、下山して回復を図る」「回復したら再び登り、SPO2が増加するようならば、さらに上にキャンプを設置する」といったことを説いた。

さらに、高山病や血栓予防などのために、医師の指示に基づいて用意した薬品リストについて説明。「今回の講演が、高所登山を計画している中高年の人

たちの参考になれば幸いです」と結んだ。

日本山岳会は、1905年創立。茨城支部は昨年6月、活動の活性化を図って発足した。山行のほか、隔月に例会と一般公開の講演会を実施している。現在の会員は23人。会員募集中。

問い合わせは、支部会員の高木康雄さん(電話029・872・5476)まで。